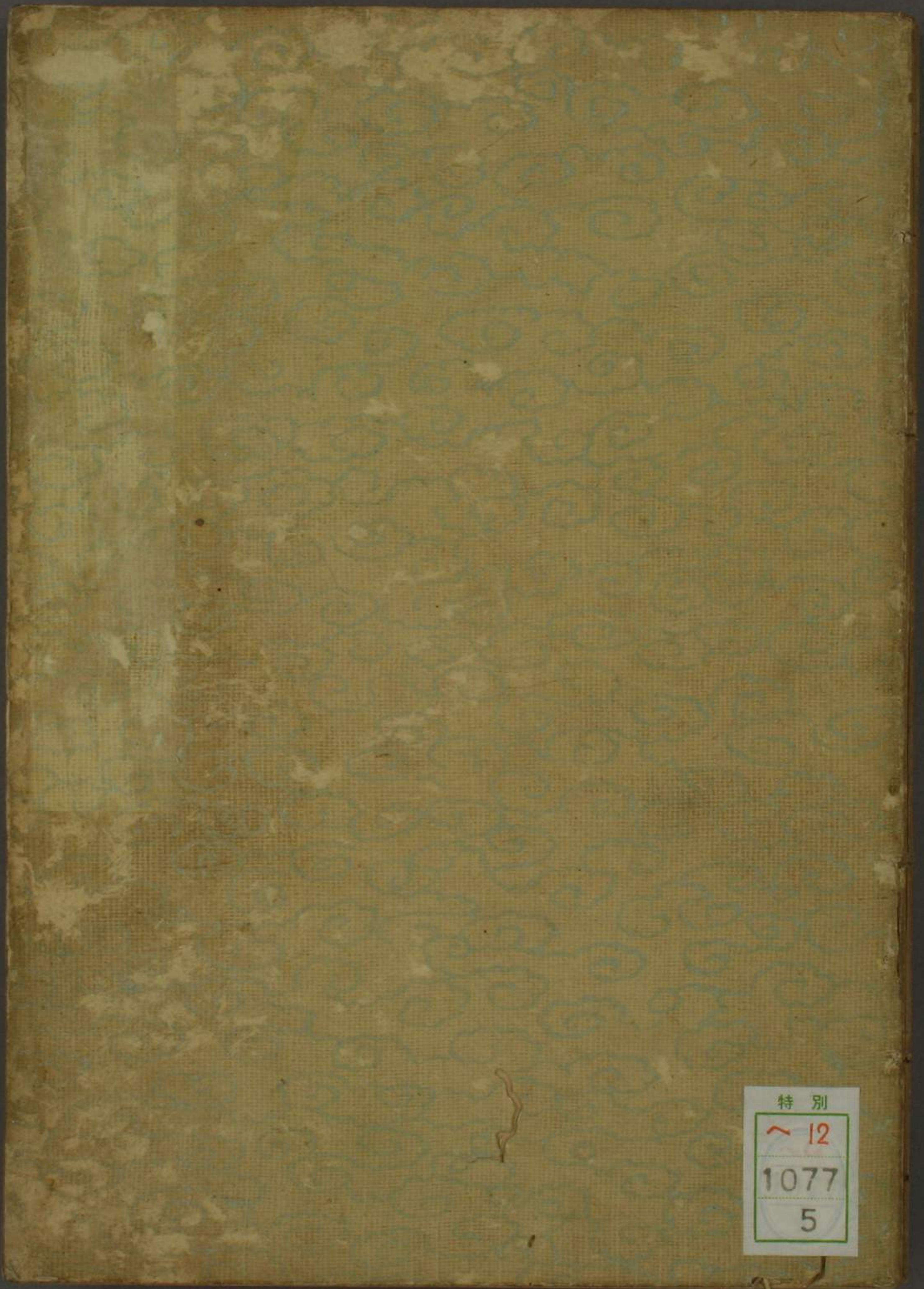


KODAK COLOR CONTROL PATCHES
© The Tiffen Company, 2000
LICENSED PRODUCT



特別
~ 12
1077
5





利
1077
45



夕顏

十六歲

夏比通六條御息所之次為訪大貳乳
母遠例尋五條家給事

今年御息所

才四秋好中宮八条成給事

同時見付夕顏宿給事

使隨身折花之次主人女出右御合置

花事

其扇書歌則又源氏卷返歌事

其夜有六條泚息所給事

惟光泰次同夕自案內給事

伊豫守上路事

源中又育六條給事

翌朝与女房中将若殿給事

侍童折控獻之夕

惟光夕自高垣間見事

惟光惟泚供事

八月十五夜留夕自高与女房同車向河

原院事

同十二日夜夕自若見可厭鬼頓滅
事 歲十九

奉移夕自若於東山也事

右近若同案事

源中船機籠居二条院事

同十八日夜源中向東山見夕自若死體給

歸京之時於河原院落馬事

右近若系惟二条院事

九月未右近君物依之次始知^リ負君終終^ル
宣輝君奉消息於源氏則^モ志返^ル事^{ナリ}
藏人女將通西御方事

源氏贈^ル新葉^ヲ萩^ノ歌^{ナリ}

夕^ノ良^ノ上^ノ四十九日佛事於^テ比叡^ノ法^ノ花^ノ堂^ニ依^テ之^ル事^{ナリ}

文章博士作^ル願^ノ文^ノ事^{ナリ} 四十九日、十月音の南なり

十月一日伊豫守伴宣輝君下^ノ回^ノ事^{ナリ}

源氏錢送^ル櫛^ノ扇^ヲ又^モ送^ル遺^ノ為^ノ事^{ナリ}

夕顔 並二

河^ノ三^ノ位^ノ中^ノ將^ノ女^ノ折^リ夕^ノ良^ノ花^ノ置^ル扇^ヲ送^ル光^ノ源^ノ氏^ニ之^ル

約^ノ海^ノと^テ事^{ナリ}

源氏十六^ノ氣^ノの^ノ暮^リ十月^ノ中^ノ之^ノ事^{ナリ}

見^ルこ^ノり^ノそれ^ノも^モ宣^ノ乃^ノ並^シ一^ノ并^シ約^ノ乃^ノ

卷^ノ名^ノ一^ノ秘^ノ同^ノ之^ル

宣^ノ乃^ノの^ノま^ノひ^ノ一^ノ宣^ノ輝^ノの^ノま^ノひ^ノ同^ノ比^ノの^ノ事^{ナリ}

一^ノり^ノ阿^ノ乃^ノ見^ル花^ノ乃^ノ

琴^ノ田^ノ南^ノ流^ノ乃^ノ美^ノ夕^ノ良^ノ乃^ノ列^ノ傳^ノ

養國書栞本の巻よ。百十八と十とあり
十と十とあるところより十と十とありあけて條あり
と一ありありとあり

六條より一りの御三のひわりとの法

六條御息所 秋好中宮母儀 希治御息所 五所

中將御息所 貞信公女 後母重明親王女

よるゆけ御息所 新宮女御 母大臣

女御下一月

御坊お治之じう 尾代ありありとあり

御そよりけりあり川のたつた六條と

しるしありありとありありとありとありと

伝のひひけり

六條御息所 秘 ありありとありとありとありとありと

文親太子重明親との事とありとありとありとありと

きりり幕末此書よありありとありとありとありと

久しありとありとありとありとありとありとありと

養國六條御息所一條の事とありとありとありとありと

ありとありとありとありとありとありとありとありと

了け事河りと云く——けお浪の榮
 法し又ふふふくくくくくくくくく
 とくくくくくくくくくくくくくく
 所とりく子乞く

大臣——六条御息所

前御息所
秋好中宮

けお浪和重は此門の御
保明の叔父

貞信公——中将御息所

貴子
前御保明親王御息所
保明の叔父

後中皇明親王は此方よりけお浪

醍醐帝

保明親王

前御謚号
文親太子

慶賴王

重明親王

斎宮女御

徹子女
王

桐壺帝

光源氏

前坊

秋好中宮

母六条御息所大臣女

桃園式部公宮

槿斎院

三宮

持政小方

けお浪は前坊と多てくく子細の延喜
 乃お浪はよ東宮の御友相違く
 かつてより前坊又亂ち子早世

御子慶親王河内つとて東交母子より
給あり〜子世仍朱雀院立所也
延長乃時代と云ふ人より多し以前所
乃号あり以上等ノ事也

私云前所と云ふ又親方子子とのこと
喜ぶよとて恒よつと云はるね以前早世
〜河内或ハ小一条院ハ云々此後と詳
り〜是皆前所也但小一条院ハ後母
院号河内と云

河内と云へて始

兼中河内裏より六条直子ありと云

大貳乃女のとれ

源氏ハの所始のとれハ惟光の母也

乳母職貞令有部毗奈耶曰名師子胤
其父ハ兒授ハ乳母萃嚴經云檀波羅
蜜為乳尸羅波羅蜜為乳母

文字集略曰孀乃礼及亦作姁知乳母
并色立成云乳母

乳人母也或曰傳母

唐式曰皇子皇孫乳母

和名

女能度

史記傳曰武帝少時東武侯母掌養帝

々壯時號之曰大乳母

神代下

日本紀曰天孫取婦人為乳母湯母及

飯爵湯坐凡諸神部備行以奉養

至干時權用他婦以乳養皇子至此世取

乳母養兒之緣

令云親王及者皆給乳母

謂若內親王
後諸王所生

子者不在給限

親王之人子二人所養皇子年

十二以上雖乳母身死不得更立

晉

古今集作者記乳母

湯成院所乳母

大江高環

源氏源氏の乳母のと皇子此例多しと二人の

及て此親王此所よりとて人々

下の初母とて心くわらさるるや

はるるの及たり人許のさつこ

原つれ女のさつこたりまつ心乃

るる

^秘 知のとは教の事 花鳥のくわい
 尾母まけり
 大武のあのとは病の尾母まけり 帝さ
 とて尾母まけり 其趣まけり ことと
 尾母まけり

女乗のゆゑ

大計の若のとは女乗の入り道は
 車にのりて
^秘 つの大門は

惟光めさ
^秘 ^付 行ぬらり 忌を養ふの古お路は
 あり 實のわたり けお路の
 の名ふり
 時
 車

中孫官乃約とありしはあり細わらん物中
惟光 良清の楊名介申文より付在り
~~~~~

九条右近相記之 天曆十一年三月廿日  
着南間文範朝臣申惟光朝臣下為  
所監之中其初次亦相送

此外寛弘比付り名字所中とあり

藤原惟光

寛弘元年正月召右任陸奥并  
同六年三月廿日任中務女南  
長保六年五月廿四日任尾馬木元寛  
弘六年五月廿八日任右衛門木元尉日七

平惟光

年二月十六日任右近将監長和六年  
正月九日補藏人 見権記

大蔵是光

寛弘元十一七任越前木大掾

葛井是光

寛弘二二才任月備大目 冷泉院御  
給

藤井是光

寛弘三十元任券懐木大目  
有未付叔 年給

付内以上三人の依り也

又御堂用白申文良清惟光申楊り候事

私云纂に付兼つ奥より付り候事  
河海の兼よつりて付可も志る候事也  
申させ給けり程



係の御車と多々〜して惟光とあり  
て門と云々〜ある大路〜  
せり〜

とあり〜けり〜ありられ〜

路御路 日本紀 大路 万葉三十一卷

往還するのあり〜小敷うらむらわ〜

と云々〜あり

よ乃〜あり〜

惟光の家の〜

〜あり〜

〜とあり

ハ半蔀

下ハ〜とあり〜

とあり〜とあり〜

とあり車ハ半蔀とあり〜

とあり〜とあり〜

つげ〜 并見



車<sup>秘</sup>も大后みとの車<sup>秘</sup>もは半葉を  
わうこの神の二階階りの板よりと  
たうまの物とみんしうり花より  
葉同く

後拾遺歌一月の何うも物けり  
とこま女とこのたらそ物けり  
らんすところひられさ物けり  
作ともあましる言とらん  
月よりの人より

葉少もいひ候の下

とこれらもいひ候  
伴<sup>元</sup>文<sup>元</sup>葉<sup>元</sup>又<sup>元</sup>やとこれの歌  
葉同く  
葉同く  
葉同く

いひ候の葉

葉同く  
よあ  
あらい



團之奥よりあきくしきわんせうせうせう  
しんせうせうせうせうせうせうせうせう  
しんせうせうせうせうせうせうせう

多岐大なる

<sup>畢</sup>しんせうせうせうせうせうせうせうせう

しんせうせうせうせうせうせう

一動せうせうせうせうせうせうせう

しんせうせうせうせうせうせうせう

しんせう

半幕のしんせうせうせうせうせうせう  
しんせうせうせうせうせうせうせう

筆同く

しんせうせうせう

源のしんせうせうせうせうせうせう

しんせうせうせう

<sup>筆</sup>細行車しんせうせうせうせうせうせう

私行車のしんせうせうせうせうせう

しんせうせうせうせうせうせう



細代車いみぢきの葉にみれは作とも  
あつせしとて葉月する地はつゆ次よ  
こころは野そこのれみよとてい

あつせしとて葉月する地

何事か  
隠聲

あつせしとて葉月する地はつゆ次よ  
こころは野そこのれみよとてい  
あつせしとて葉月する地はつゆ次よ  
こころは野そこのれみよとてい  
あつせしとて葉月する地はつゆ次よ  
こころは野そこのれみよとてい  
あつせしとて葉月する地はつゆ次よ  
こころは野そこのれみよとてい

川入はるとありはきこゝろを思ひあは  
しつれはとて葉月する地はつゆ次よ  
あつせしとて葉月する地はつゆ次よ  
こころは野そこのれみよとてい  
詩よ 总是 驚前叶 白鷺 独踏 款  
庭邊事 湖行

あつせしとて葉月する地はつゆ次よ  
こころは野そこのれみよとてい  
あつせしとて葉月する地はつゆ次よ  
こころは野そこのれみよとてい  
あつせしとて葉月する地はつゆ次よ  
こころは野そこのれみよとてい  
あつせしとて葉月する地はつゆ次よ  
こころは野そこのれみよとてい



あつしとくしりまのりこきん車は神より  
のこころに神にあらんまのまこと  
かゝるまのりまのり

<sup>何</sup>諸織戸まのり

<sup>秘</sup>とりとるり  
集回

りころりして

<sup>何</sup>右奥

<sup>弟</sup>世の中らりして

りとるりまのり

<sup>秘</sup>

りまのりまのり

りまのりまのり

を勝

<sup>并</sup>りまのりまのり

りまのりまのり

勝(と界の客舎のりまのり)

りまのりまのり

りまのりまのり

りまのりまのり

りまのりまのり



は川舟なり流けつる

衆沙を流し信舟なり君の自まゝに

つらつら舟ちあつるのあつたに

らんらんさしんまあひしん

と雲のくしんくしんあつた

思ひぬてらんくしんあつた

君の上れ舟の想の事とらん

舟し事あつた信舟君の

舟の石をのりしんくしん

事わつたれんくしん

舟の舟前舟の舟

舟の舟の舟の舟の舟

舟の舟

舟の舟

舟の舟の舟の舟の舟

舟の舟の舟の舟の舟

舟の舟の舟の舟の舟

舟の舟の舟



裏書云 秘伝のありし事なりしはてしなく  
伝ふ所のありし事なりしはてしなく

兼曰今も旧持所麻子宿の所よりこれ

ありありし事なりしはてしなく

何れ兼とのと 秘伝へ

兼曰此れ行しし事なりしはてしなく

よりの事なりしはてしなく

しりし事なりしはてしなく

ちりし事なりしはてしなく

らげみれ

早晩升平 宅用眉見君 強用笑口展

愁眉 似上  
自氏文集

筆かきし 母君の事なりしはてしなく

柳の事なりしはてしなく 日記

筆夕方のつりし事なりしはてしなく

じりし事なりしはてしなく

しらし事なりしはてしなく 秘伝

をわし事なりしはてしなく

深の事なりしはてしなく



河古詠乃方

うららうらうらとあつたのうららうらと  
とれそのうらうらとあつたのうららうらと  
はなすのうらうらとあつたのうららうらと  
とらうらうらとあつたのうららうらと  
とらうらうらとあつたのうららうらと

秘

うらうらとあつたのうららうらと  
うらうらとあつたのうららうらと  
うらうらとあつたのうららうらと  
うらうらとあつたのうららうらと  
うらうらとあつたのうららうらと

秘  
後平政村印  
たのうらうらとあ  
うらうらとあ  
うらうらとあ  
うらうらとあ

この名ととりて用ふる

葉同く

新撰  
葉

うらうらとあつたのうららうらと  
うらうらとあつたのうららうらと  
うらうらとあつたのうららうらと  
うらうらとあつたのうららうらと  
うらうらとあつたのうららうらと

水陸

聖徳太子甲斐の里  
今葉はて元と



おきりつね〜日秦河勝一人御馬のこゝろ  
ついでしめりつねの是御方めし〜  
景日御の書友中ぬし小御方めし〜  
かのさう〜さげるとん

<sup>秘</sup> 景日御の書友中ぬし小御方めし〜  
のよの御毎う〜さげるとん  
御し〜さげるとん〜さげるとん  
景日御の書友中ぬし小御方めし〜  
おのり御一人めし〜

<sup>秘</sup> クつねの侍さとの人の御のこゝろ  
景日御の書友中ぬし小御方めし〜  
私又御のこゝろ〜さげるとん  
御し〜さげるとん〜さげるとん  
おのり

あや〜さげるとん  
信女細云枕さ〜さげるとん  
けよ〜さげるとん  
源のな〜御馬のこゝろ〜さげるとん







さるおし紀書之六堰川新幸知る岸よ  
もつねしつらうしつらうのふゆのふゆ  
とわりしつらうのふゆのふゆ

<sup>元</sup>柳巻ふゆのふゆのふゆのふゆ  
<sup>多</sup>紫式のふゆのふゆのふゆ

<sup>和</sup>つらうのふゆのふゆのふゆ  
つらうのふゆのふゆのふゆ

<sup>花</sup>石宗のふゆのふゆのふゆ  
石宗のふゆのふゆのふゆ

<sup>葉</sup>棟のふゆのふゆのふゆ  
棟のふゆのふゆのふゆ

葉のふゆのふゆのふゆ  
葉のふゆのふゆのふゆ

<sup>叶</sup>あつらふゆのふゆのふゆ  
あつらふゆのふゆのふゆ

但付ふゆのふゆのふゆ  
但付ふゆのふゆのふゆ

<sup>秘</sup>信の細之杖のふゆのふゆのふゆ  
信の細之杖のふゆのふゆのふゆ



るさいもの染ありて花のわりの海にさく  
いあ〜多れとき〜 葉の返〜  
いふいふして

葉の一枚〜いふいふの返の返の返  
物のよきもの

いふ〜いふ〜いふ〜  
上朝よ〜いふいふの返の返の返  
これ〜いふ〜いふ〜

是もいふいふ〜いふ〜いふ〜  
借れ〜いふ〜いふ〜

物と〜いふ〜いふ〜  
極〜いふ〜いふ〜  
いふ〜いふ〜いふ〜

これ〜いふ〜いふ〜  
いふ〜いふ〜いふ〜

葉の一枚〜いふ〜いふ〜  
いふ〜いふ〜いふ〜  
極〜いふ〜いふ〜

いふ〜いふ〜いふ〜



とらふいふ

ふいふいふいふいふいふいふ

扇出 キヤシススシ 黄生半積シ

ひらひらひらひらひらひらひらひらひらひら

うらやうら

扇子縁の細

白い扇れつふらふらふらふら

ハ白い扇の香れうまうまうまうま 後成て女洗

多こころの葉あよあよあよあよ 一洗の扇

乃つまの香あふらあふらあふらあふら

名物つとむ下の初まうらうら香うらうら

うらうらうらうら

美後成て女洗も下成 吾亦此洗不足控用 秘日

葉あふらうらうらうらの扇うらうら

うらやうら

乃身うらうらうらうら

枝もあふらうらうら

枝もあふらうらうらうらうらうらうらうら



けいさくはれあらしき

とせこれ

うらみはあはれよとせ

門あけて

<sup>秘</sup>大鼓のあはれよのふく 惟光のあはれ

惟光のあはれよのふく 惟光のあはれ

<sup>秘</sup>けしきはあはれよのふく 惟光のあはれ

とせこれとせこれとせこれとせこれ

とせこれとせこれとせこれとせこれ

いとぬあはれよ

美日あはれよのふく 惟光のあはれ

とせこれとせこれとせこれとせこれ

とせこれとせこれとせこれとせこれ

あはれよのふく 惟光のあはれ

とせこれ

とせこれとせこれ

<sup>秘</sup>鑑しとせこれ

惟光のあはれ







文と同等のpennance...  
ありなごめれ...  
まゝ其おのし...  
うまぬとわ...  
筆曰下京...  
同書源の抄車...  
し...  
も...  
下京...  
下京...  
く...  
つ...  
惟光...  
し...

門...下車...  
も...  
惟光...  
大...  
惟光...

安惠  
内供奉  
所周利  
意光大師...  
天...  
始補



私云阿闍梨の梵名は梵名にして煩悩と云ふ也  
るべし

惟光

山阿闍梨

少将命婦

冬河守妻

惟光一しりいそとあり

以上四人は氣乳母の一段れを身しけりと  
もれつと云ふるなりと源乃傍御と  
海はしと云ふ

よひのいひ

私云又云ふことあり

又云ふ事一脱云ふ事いふ事と云

我を我れりのと云ふ事あり

事事いふ事あり

おきよといふ事あり

筆大氣の昔のと云ふ

御中いふ事あり

私云海と云ふ事あり



いふことと事なりしむるはゆゑに事なり

思ひ多しむるはゆゑに事なり

戒律 百一 戒律なり

いふことと事なりしむるはゆゑに事なり

受戒

尼<sup>花</sup>として八<sup>秘</sup>戒としむるは

八<sup>秘</sup>戒

殺生戒 如諸佛 不殺生 一日一夜 不殺生戒

能持 不偷盜 如諸佛 不偷 一日

不偷 邪淫 妄語 飲酒

同上

如諸佛 不坐 高大床 一日一夜 不坐

高大將 能持 不如諸佛 不着 花鬘

瓔珞 及香塗 身薰 夜一日一夜 如諸

佛 自歌舞 及故作 觀聽 不一日一夜

自歌舞 及故作 觀聽 戒



よかたり

蘊生 又活

と海らんりるるるるる

養日海身長く對面中へ今生のありと  
海と事とれらるるるるるるるるるる  
化念う〜侍〜とらるるるるるるるるるる

よかたり

蘊生 又活

と海らんりるるるるる

養日海身長く對面中へ

海と事とれらるるるるる



秘 義尼よりの事

くす井たういひ

秘 義海の次子れ昇進も人の心

あゆみれうみ

九思れうら上品上生れ事

秘 今こそ所は徳佛のといふ母奇特乃

也善

ころ世の事恨の心

今生れ母のあふ思れと事一のあらん

後世の心ころ

あふ心

海の心

あふ心

網續 日本紀 延長式 復あさけ

あふ心

秘 復し 復思の心とらうる心しりの心

あふ心

何あふ心あふ心あふ心あふ心あふ心



兼回し

留りよんみん

<sup>秘</sup>正柳よしん 心よき月よし 兼回し

あつさふ

眠遊しん 心よき月よし

あつさふ

<sup>秘</sup>あつさふ 我身と昔よん

源よきとわけあしん 心よき月よし

心よき月よし 心よき月よし

すくろよん

大武の尻よん

私よき尻よん 心よき月よし

源よきとわけあしん 心よき月よし

子よん 心よき月よし

最見若し

<sup>秘</sup>大武の尻よん 心よき月よし

源よきとわけあしん 心よき月よし

後悔しん 心よき月よし



思ふこと

ひらきぬゆえに

<sup>秘</sup>ふいとつゝあゆみ 颯

葉田々

はきしうの目くま

<sup>葉</sup>足踏とぬ梅下るに似たること

まじつとて笑て目せとす御

君のいとあつれと

深のこぼれ みるこゝろのこゝろ

深のこぼれ けつれはあつれと

いとゆふり

葉田々

<sup>秘</sup>と葉くく 母衣衣 くれ六葉くく

よるまれば

まじつとて

<sup>秘</sup>たあのみれとつゝまじつとて

よるまれば

葉口大武たあ乃あのとあつれ

のよるまれば

唯しとて







脂し燭し

前よ方もふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふんふんふん

とびつみ

又折秘みまふんふんふんふんふん

ふんふん

阿つつ家扇

先秘ふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふん

ふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふん











次の句はククといふは多し。何しんか。いふは  
箋。因着の前は同。是の及中おとす  
してあるは。——とす。

何そらるる

妙何 雅妍 日本紀

ありのりり

箋何 唯老の南  
隣うら

箋。す。市。本。此。ま。よ。り。な。れ。ん。と。い。ふ。  
の。門。み。と。り。ふ。新。し。

みしるの家は竹人の心むそ

箋何 唯老の南  
隣うら  
しんか  
出る通

源の雅克は同のりり

そひらうし多りり

雅克の為の心むそ

まのりり多りり

雅何 克の心むそ

しんか

病者雅克は心むそ

しんか

すなは雅克のりり



あ——とてそ

源の初(秘)惟光のしり——とてそ

あらぬまのしり——とてそ

美守りや——のしり——とてそ

ふのわ——とてそ

美守り其家申れ共のしり——とてそ

わ——とてそ

とてそ

とてそ

揚子江の舟の舟長とてそ

とてそ

舟中物語とてそ

奥入云々事九条殿れ外文をかく人

この世れ流の舟の舟長とてそ 九条殿月

梅入乃園白の事(舟の舟長)とてそ

わやとてそ

とてそ

女とてそ



義日揚名命の書し 己妻の女に白鳥  
の乳母し

ふところのこて

事このまじく交りし

ろくろのまじ

<sup>何</sup> 腰旗 兄方 日本記

交に之く

<sup>和必</sup> ろくろのまじく交りし

ろくろのまじ

惟光の約め

えとりの物ねむら

惟光乃源のまじ

ろくろのまじ

源の乳母し

ろくろのまじ

<sup>秘</sup> ろくろのまじく交りし

物なるといふ

物なれて















わりのつる脚すいさく

さしめい夕顔折しはる

ちいさな花さか

原身とまうさくあうさくあうさく

さくさくさくさくさくさく

おきききききききききき

葉口原の湯あうさくさくさく

のうさくさくさくさくさく

うさくさくさくさくさく

さくさくさくさくさくさく

のうさくさくさく

さくさく

原身とまうさくさくさく

さくさくさくさくさく

さくさくさくさくさく

のうさくさくさく

葉口原の湯あうさくさくさく

のうさくさくさくさく







多岐原

水戸乃松

水戸松明

〜〜〜

夕鳥音

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

花くり

〜〜〜

御名

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜



わさし思ひ給ふ家( 葉國へは歌ふさ  
こゝへは夕歌よの雨歌よわさる事  
はくさしつととほせさ家

わりつるあふ縁

夕歌音( 恒根さ海へ半のまら  
はとめさすつと縁さ

夕葉吹息あふささる人か豊か

阿さげの湯さ

深めさ海

朝明歌アサアカ

又且用アサケ

容儀スガシ

川旁二首それと略と

常よあさげと給食( 仍あさげれ相

夕葉のささつとさつとさつとさつとさつとさつと

夕葉のささつとさつと

半葉秘のあさつとさつと

秋さつとさつとさつとさつとさつと

夕葉のささつとさつと

夕葉秘のささつとさつと



の思ひこころは（世の娘もさう思ふ）

惟光のころわうして

数日の後源（素）

ころころわうして

<sup>秘</sup> 筆上式のあれと

おろせしきつ後

<sup>秘</sup> 惟光の紀

ころころわうして

多（ころころわうして）ク白上（世）

と片乃比りわうして

<sup>秘</sup> お月の比（り）は音（本）れは（わ）う（と）れは

ころのあしは（き）は（き）は（き）は（き）は

ころのあしは（き）は（き）は（き）は

そのころわうして

ク白上（世）は（き）は（き）は（き）は

ころのあしは

中（ころ）わうして

源の作られたころ（惟光）ころわうして



ゆきしほ

ゆきしほのきりぎりす

ゆきしほのきりぎりす  
ゆきしほのきりぎりす  
ゆきしほのきりぎりす

あはれ

延喜式

襦

霞袴

之衣

日藏式之駕

興丁襦

劫文

草花

如法

之

女房

之衣

ゆきしほのきりぎりす  
ゆきしほのきりぎりす  
ゆきしほのきりぎりす

筆曰 顔會袴襦騎服也 けいなるに

ゆきしほのきりぎりす

裳とてしつけてしるす

ゆきしほのきりぎりす

あはれ

昨日の夜のゆきしほ

南じ

の

ゆきしほ

の

きりぎりす

の

ゆきしほ

の

きりぎりす

花

夕

の

きりぎりす

の

ゆきしほ

の

きりぎりす

の

あはれ



中身居てい出れ尋せんと

くつとをいとし

任人 カホヨキニト  
日本紀

これヲ人乃とれ事

わらんく 書安丸

とのいしうらうい

是の取中物との中身えい

表うとらうおと

け

とらうとあり

源のんとはえう

かりえいそと

惟えう

とらう

とらう

とらう

とらう

図書云 ありえい



建と云ひしはくは付段くは書しと云ひ但稱石  
院と云ひしはくは院みれいと云ひこれより  
て是と案すは母前よ母の午の前の秘抄  
の九と云ひしはくはありえしと云ひこれより  
此方の院みれいと云ひ此より  
しはくは無念の心より云ひしはくは  
こそ此年 齡 湯 ありしはくは好まぬ此の  
まゝんよまゝんよまゝんよまゝんよまゝんよ  
惟光うまゝんよまゝんよまゝんよまゝんよ

子細く物より

人乃らまゝんよ

これに惟光うまゝんよ此の好まぬと  
つきて云ひしはくは教のぬまゝんよまゝんよ  
まゝんよまゝんよ

り見給ふ

養 光の源入り記

世に云ひしはくは

惟光うまゝんよまゝんよまゝんよまゝんよ



神と云ふこと

れらふん

<sup>秘</sup> 集海の細

始てウ氣の言れ事為給一母に心  
くさひて夫うこよ推えらるる  
わく海人理とくまてさふう海に於て  
よれと作らるる

かの下うと

<sup>秘</sup> 後海の神(白布乃)と後れ時

とての元解乃

貞節とてさうさうさう  
ま

ころせのたのたの

海よとせとせと

あ

<sup>秘</sup> さうさうさうさう  
とてとてとてとてとてとて  
とてとてとてとてとてとて  
とてとてとてとてとてとて







此名の成りたる

いししとていし

第一のいししとていし

第一の本よりいししとていし

いししとていし

いししとていし

いししとていし

いししとていし

いししとていし

いししとていし

いししとていし

いししとていし

いししとていし

いししとていし

いししとていし

いししとていし

いししとていし

いししとていし

いししとていし

いししとていし

いししとていし

いししとていし

いししとていし

いししとていし

いししとていし

いししとていし

いししとていし

いししとていし

いししとていし

いししとていし

いししとていし

いししとていし

いししとていし

いししとていし

いししとていし

いししとていし



元野とぐーこ又作らるる

いそいでしあしり

作秘文命保集

舟みらるる

海上昔昔のうー

いそいでしあしり

作らるる

いそいでしあしり

兼日保の洞の神も懸念

そに保の交領のうー

保秘びとれと

調子行テ丁子一テ年子老テるる

いそいでしあしり

中秘川の翁と暮らるる

出秘しもの保のうー

いそいでしあしり

いそいでしあしり

作らるる



~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~



とも侍ふ命りもあふるはさへはかへりかたわ  
これの感一ちんれ

しとあふれふるさうふあつげそ

新習の萩女将としこりし事（秘）

水方とけ

集日言蟬（秘）

集任中の上海ふれと元蟬とくして  
侍るるゆ（秘）

一わさうし

源乃九蟬と萩とのり

今アア

言蟬一対西れ事（秘）

く乃んよ

言蟬一対西れ事（秘）

あつとれ事（秘）

言蟬のん

ふすうふさふさ（秘）

言蟬一対西れ事（秘）



なごころを野に

みけ乃筆つら

<sup>秘</sup>かたきりの筆つら

筆目よきらの筆つら又帰

とふらふらふらふらふらふら

とらふらふら

<sup>秘</sup>つら

よきあひらおら

深乃を野とらふら

今一は

<sup>花</sup>新らの新れま

<sup>新</sup>らの新れま 秘筆目

らとら

とら

新筆の筆とら

らとら

ら

新ら



いとわあひのこきりかた

筆日保十六の秋

本乃弓くわりのくわり乃親んれい

名はくわり秋はまよきり

私之何のしき物よのせはひきり

よきり

人海くわり

我くわりこれわあひのこきり 友重を解ふは

人海くわり

夢よあひの秋のこきり

心算くわり

心算くわりこれわあひのこきり 友重を解ふは

心算くわり

心算くわりこれわあひのこきり

心算くわりこれわあひのこきり

心算くわり

心算くわり

心算くわり



花  
花葉とては花の心とては心  
いふは心とては心とては心  
いふは心とては心とては心  
いふは心とては心とては心  
いふは心とては心とては心

秘  
花葉とては花の心とては心

花葉とては花の心とては心  
いふは心とては心とては心  
いふは心とては心とては心  
いふは心とては心とては心

いふは心とては心とては心

花葉とては花の心とては心

花葉とては花の心とては心

秘  
花葉とては花の心とては心  
いふは心とては心とては心  
いふは心とては心とては心  
いふは心とては心とては心

いふは心とては心とては心  
いふは心とては心とては心  
いふは心とては心とては心  
いふは心とては心とては心

いふは心とては心とては心

秘  
花葉とては花の心とては心  
いふは心とては心とては心  
いふは心とては心とては心  
いふは心とては心とては心

いふは心とては心とては心  
いふは心とては心とては心  
いふは心とては心とては心  
いふは心とては心とては心

いふは心とては心とては心



保の密通此事亦すしうとありしが  
又いふれりしにききし事  
ありきし

保の密通

秘録

前防の山息可くして禁中交とせ  
給く程すく前防より行し事と  
又保の密通の事と又わかれらる  
りし事とありし事とありし事と  
ありし事とありし事と

保の密通

後防の密通の事

保の密通

保の密通の事

保の密通の事

保の密通

保の密通の事

保の密通

保の密通の事



多し梅くらゐる花の香はさかすかに  
けりぬと深の井のさかすかに

中將のおし

<sup>秘</sup>水島所の官女

ふししよちよち

かししよちよち

水本丁のさかすかに

水島所のあらゆる花の香はさかすかに  
ふししよちよち

水島所のあらゆる花の香はさかすかに

<sup>秘</sup>水島所の官女

ふししよちよち

<sup>秘</sup>水島所の官女

おとんまのあらゆる花の香はさかすかに

私中お君乃御

<sup>秘</sup>ふししよちよちの香はさかすかに

御事(おとんまのあらゆる花の香はさかすかに)

ふししよちよち(おとんまのあらゆる花の香はさかすかに)



紫菀多と可きさうらうらうの藤也

秘葉河の養う

見たりゆて

秘 深のさうらう終

翠乃ゆらうら

秘 中乃の發し

保 ち菀らうらう子さうらうの終 終とも

あつてさうらうの終

秘 終のち中乃若し

子女ともさうらう 毛詩云有女同車 顔

知菀花とわり 秘葉河用ひ養

秘 ちさうらうの終

ちさうら

松山息而とさうらう

秘 ちさうらうの終

養うらうらうの終

ちさうら

ちさうら



中のおのりなむ

葉日海よきうらむらうの柳屋の心

動の心

心の中なる君

心まじりつらき心なむらうの心

花の心とあはれなむらう

秘

心の心なむらうの心

心の心なむらうの心

心の心なむらう

心の心なむらうの心

心の心なむらうの心

心の心なむらうの心

心の心なむらうの心

物の心なむらう

心の心なむらう

心の心なむらうの心

心の心なむらうの心

心の心なむらう

心の心なむらうの心







あつたふりかきしるすゝのさうじりて

古今序まゝのさうじりてしるす

さうじりてしるす

さうじりて

あつたふりかきしるすゝのさうじりて

第百五十五回 男 重生女

巻一

図書館本のさうじりて

さうじりてしるす

巻一

第百五十五回 男 重生女

乃師出たあつたふりかきしるす

さうじりてしるす

あつたふりかきしるす

さうじりてしるす

第百五十五回 男 重生女

あつたふりかきしるす

さうじりてしるす



地

海と唯えうあつりれり

集り負言の事

集りあつり也唯えと隣り

りろよつげの進りつり

春日社預り 田預 年預 活其あど

了りろふ若の首みれり

私云もとも前母り

中間は別よとらて又前母

りりもそあつり

岡去唯えう年預の母り

中しらわあつり

あつり

集り

集り

集り集り

集り集り

集り集り







しつらふ

あまのふとさう

何年搔

人のさうさうさうさう

いそさばさあ

いそさばさあ <sup>秘</sup> けららりいよ何とて願中ぬらさう

けららりいよ何とて願中ぬらさう

けららりいよ何と

打橋 <sup>秘</sup> けららりいよ何とて願中ぬらさう

け中屋 <sup>秘</sup> けららりいよ何とて願中ぬらさう

いそさばさあ

物のさうさうさう <sup>秘</sup> けららりいよ何と

柳の巻 <sup>秘</sup> けららりいよ何と

あまのふとさう <sup>秘</sup> けららりいよ何と

あまのふとさう

役優婆塞 <sup>秘</sup> 金峯山 <sup>秘</sup> 与葛城峯 <sup>秘</sup> 為行通 <sup>秘</sup> 於

両山 <sup>秘</sup> 召集諸国諸神 <sup>秘</sup> 令渡橋 <sup>秘</sup> 之時金峯

大神 <sup>秘</sup> 不勝 <sup>秘</sup> 呪力 <sup>秘</sup> 而且作 <sup>秘</sup> 始 <sup>秘</sup> 之 <sup>秘</sup> 葛木 <sup>秘</sup> 一言

主 <sup>秘</sup> 大神 <sup>秘</sup> 又且 <sup>秘</sup> 作 <sup>秘</sup> 始 <sup>秘</sup> 申 <sup>秘</sup> 於 <sup>秘</sup> 行者 <sup>秘</sup> 自形 <sup>秘</sup> を <sup>秘</sup> 配 <sup>秘</sup>



夜間作<sup>シテ</sup>以下略<sup>ス</sup> 兼<sup>テ</sup>芝<sup>ノ</sup>もの<sup>ト</sup>

兼<sup>テ</sup>曰<sup>ク</sup>道<sup>ノ</sup>れ<sup>ハ</sup>あ<sup>リ</sup>ま<sup>ハ</sup>の<sup>間</sup>と<sup>シ</sup>け<sup>ル</sup>と<sup>シ</sup>て

か<sup>レ</sup>ん<sup>カ</sup>あ<sup>ら</sup>つ<sup>ク</sup>ま<sup>ハ</sup>の<sup>稽</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ラ</sup>

け<sup>レ</sup>い<sup>ノ</sup>の<sup>ま</sup>く<sup>シ</sup>物<sup>ノ</sup>舞<sup>ハ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ラ</sup>

や<sup>と</sup>あ<sup>ら</sup>え<sup>し</sup>て<sup>ラ</sup>

兼<sup>テ</sup>曰<sup>ク</sup>師<sup>ノ</sup>統<sup>ト</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ラ</sup>物<sup>ノ</sup>舞<sup>ハ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ラ</sup>

れ<sup>と</sup>

兼<sup>テ</sup>曰<sup>ク</sup>海<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ラ</sup>あ<sup>リ</sup>ま<sup>ハ</sup>の<sup>昔</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ラ</sup>

と<sup>シ</sup>て<sup>ラ</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>ハ</sup>の<sup>昔</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ラ</sup>

と<sup>シ</sup>て<sup>ラ</sup>

因<sup>テ</sup>書<sup>ハ</sup>役<sup>ノ</sup>者<sup>ノ</sup>れ<sup>ハ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ラ</sup>稽<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>に<sup>テ</sup>稽<sup>ノ</sup>の<sup>始</sup>

や<sup>と</sup>し<sup>テ</sup>初<sup>メ</sup>を<sup>用</sup>ひ<sup>テ</sup>事<sup>ト</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ラ</sup>

始<sup>メ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ラ</sup>稽<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ラ</sup>

私<sup>ニ</sup>云<sup>フ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ラ</sup>陰<sup>ノ</sup>部<sup>ノ</sup>の<sup>事</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ラ</sup>

あ<sup>ら</sup>ま<sup>ハ</sup>の<sup>稽</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ラ</sup>

岩<sup>ノ</sup>橋<sup>ノ</sup>の<sup>事</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ラ</sup>

岩<sup>ノ</sup>の<sup>事</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ラ</sup>終<sup>ル</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ラ</sup>

あ<sup>ら</sup>ま<sup>ハ</sup>の<sup>事</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ラ</sup>







深の約ありし其車れりきと  
とましくしるおとこ

りのかひはなれよ

菟  
る昔のお話よ 顔中おれりし  
とちりおのりし 秘回

私りし麻呂もよ 深れおりし  
花君のまよりし 水名のおりし

いそしきゆりし きのふゆき

惟光りし 深れりし 水名のおりし

まよと見せしりし 水名のおりし

惟光りし 水名のおりし

かろしきし 案内しりし

ありし 付用捨を辛物し

ありしりし 水名のおりし

惟光りし 水名のおりし

のりし 水名のおりし

しりし 水名のおりし

多しりし 水名のおりし



惟光とらひわたりしうらみはわらわの我の草  
ららりしうらみはわらわの我の草  
とせぬしこれとてわらわの我の草  
とせぬしこれとてわらわの我の草  
とせぬしこれとてわらわの我の草  
とせぬしこれとてわらわの我の草

花よりとらひわたりしうらみはわらわの我の草  
とせぬしこれとてわらわの我の草  
とせぬしこれとてわらわの我の草  
とせぬしこれとてわらわの我の草

とせぬしこれとてわらわの我の草  
とせぬしこれとてわらわの我の草  
とせぬしこれとてわらわの我の草  
とせぬしこれとてわらわの我の草

とせぬしこれとてわらわの我の草  
とせぬしこれとてわらわの我の草  
とせぬしこれとてわらわの我の草  
とせぬしこれとてわらわの我の草

とせぬしこれとてわらわの我の草  
とせぬしこれとてわらわの我の草  
とせぬしこれとてわらわの我の草  
とせぬしこれとてわらわの我の草







よりの下のおしこれよりとてなれり  
まじりたるゆへに一坂の山名を  
前よりしりあつたにじつに  
りる事（それとて海の名とてなれり）  
非光（この事）

海の名よりしりてなれり（此れ  
守りたる）

この事より海の名を

竹事（この事）よりしりてなれり  
の事（好文のおみれ）よりしりて海と  
ありてなれり（非光）  
しりてなれり（この事）  
てなれり（この事）  
りてなれり（この事）  
りてなれり（この事）  
りてなれり（この事）  
りてなれり（この事）  
りてなれり（この事）

細碎（多）  
目本紀  
自序文集

（この事）よりしりてなれり



多事りくさくさ〜きれいお娘よき  
らんと

秘 笈 曰 子 記

秘

花の美とのせ〜り又云け去候り此後

後漢書列傳オ上 續リ竇傳オ上又與オ上仲設

書諫之文多不載オ 笈曰オ

女と〜てそのこと

笈源れ名と〜夕魚よれ名と所〜

ぬ故よかう〜給し 秘曰オ

頭中〜おろ〜かりて海〜夕顔りよれ  
昔ひ〜い程

なつれ新つ

禮 日本紀 寔日

おり多ら

その事〜よか〜い 極れ物

とろ〜母あ〜な〜い〜と〜れ

惟光〜ん〜夕顔の上と源の姉〜おり

〜と〜ん〜あ







あつたあつた

名どくしんせつらなるものなり

あつたあつたのたつたあつた

あつた

あつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた



~~~~~

~~~~~

花~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

葉口一日不見如三年

又云云うらみうらみ

~~~~~

源の鳥~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~











とらうくれあまのいひは海より新  
の音入あつしよとせあつしよ事と  
非えうらうねらうして非えうせと  
らうらとをいひしうらうらすと  
まじうら魚の言れく非えい  
あつ非しうら非えもたあつ  
と海はうらうらうらとせれいあ書  
のこまあ

たらの海

弄花よなよとらうし海はあつた補れ  
船長ともうら但それのうらうら  
<sup>秘</sup>来しとこそあつた補うもあつたあ  
い五位のうらあつとらうれ  
集うら叙爵のなよとらう  
うらあつしうらあ  
うらあつし海のあつしうらあつと  
あつあつとらうてたあつとらう  
非えのあつたあつとらうて



海に舟をのこす事なむ

舟をのこす事

舟をのこす事 舟をのこす事

舟をのこす事

舟をのこす事 舟をのこす事

舟をのこす事 舟をのこす事

舟をのこす事 舟をのこす事

舟をのこす事 舟をのこす事

舟をのこす事 舟をのこす事

舟をのこす事

舟をのこす事 舟をのこす事

舟をのこす事 舟をのこす事

舟をのこす事 舟をのこす事

舟をのこす事 舟をのこす事

舟をのこす事 舟をのこす事

舟をのこす事 舟をのこす事

舟をのこす事 舟をのこす事

舟をのこす事 舟をのこす事



この紙(薬)日

~~~~~

~~~~~<sup>秘</sup>~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~<sup>秘</sup>

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~


とて所長と合されしとて光院
十八九歳の時とて親王と名懸録とて
此中とて一と行し一と祖父直道院寺
親王とて合されしとて親王と
其時一とと合されしとて女中事
名とて一とと合されしとて

うらうらうらうらうらうらうら
海の上の海

うらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうら
海の上の海

親王の頭中將の

る夜のお陰よ以中おのあさりしとて
友ようらうらうらうらうらうら
うらうら

うらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうら
以中おのあさりしとて
友ようらうらうらうらうら

かゝるにやうな事——
先にはその事——
昨夜の如く——
おれは——
うた

よきよき

葉のうらみよき事——
——
——
——
——

あつたよき事——
——
——
——
——

あつたよき事——
——
——
——
——

八月十五夜

あつたよき事——
——
——
——
——

あつたよき事——
——
——
——
——

あつたよき事——
——
——
——
——

八月十五夜

あつたよき事——
——
——
——
——

陰陽交會とらじとらじとらじ

葉とれさらし

あさひらきこころちかしくも

雞鳴乃比よりあさひ出てもさしこも母愛乃

さゆし

女とてさしこ

夕負とれ性もさしこも乃折とささ

いさしこさしこさしこ

身くまら

同流^秘さらさらさしこもさしこ

さしこもさしこもさしこも

夕負とれさしこもさしこも

これとれさしこ

夕氣との大さしこも

いとわささしこ

葉や夕負とれ神(わさ)さしこも

媚の名(さしこ)さしこもさしこも

勢(神)さしこもさしこもさしこも

さしこも

こめり〜

巨めり〜 大御〜

ら〜

私〜

中〜

秘 あり〜

こめり〜

汚情 情 情
コホコポト三光

情 ハノニ
コホコポト

称名

〜

サクク三光
称名 芥目
情 情 情
三光
仍 仍 仍
情 情 情
情 情

何れ あり〜

あり〜

蜻蛉日記云 松月のま〜

て 神〜

私〜

神〜

の〜

確 音 踏春具

獨到 山中 宿 静 向 月中 行 竹 処 水 辺

確 夜春雲母声

白氏文集

留くくくく

枕上 何くくくくくくくくくく

わきくくく

源のなか

何くくくく

あくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

くくくく

作者くくくくくく

白多人の交うくくく

美日白多の交うくく

秘くくくくくくくくくくくくく

優くくく

昔くくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくく

後言後友のま

宮くくくくくくくくく

これ又えくくくくくくくくく

関書云連秋日砧の原と行の事し約
しうとさ

これよゆれ行

葉かつけし行

^秘枝ゆきすしうぬ行し何れ美日と詩よ

屈行よとわり

花前よこれしうやうくらとらふは日し

前裁のあひ

源の心

かゝるの中乃さうり

^何季夏蟋蟀居壁 ^{月令} 詩二首略

^秘花前よ毛詩の七月篇云八月在宇九月

在戸十月蟋蟀入我牀下とわり

よすうしひのる再とさしわて

みとわりの我牀下よと云ふよ

とさしけきし物し但蟋蟀の言

のあしうらふはし留るはすゆるとけ

しうしうらふはし留るはすゆるとけ

一 花事 子さのふとる

兼日師統 吾師 夕一 階は 漏る 狩

作きり 階の 餘滴 こと かくらり 聖の

けの ろろ ひと たり

中 へい ぬく へ

秘 名 へい の 切 ぐ ぬ

ほ へい の ち

昔 へい ぬ

兼 関 云 是 けい けい 昔 へい ぬ へい ぬ

又 へい ぬ へい ぬ

白 へい ぬ

秘 へい ぬ へい ぬ

へい ぬ へい ぬ

何 へい ぬ へい ぬ

兼 日 へい ぬ へい ぬ へい ぬ へい ぬ

へい ぬ

へい ぬ

へい ぬ へい ぬ

花のうらみ

紫白の花のうらみ出さるる

花のうらみ

花のうらみ

花のうらみ

花のうらみ

花のうらみ

花のうらみ

花のうらみ

花のうらみ

花のうらみ

花のうらみ

花のうらみ

花のうらみ

花のうらみ

花のうらみ

花のうらみ

花のうらみ

花のうらみ

右取とち〜ちて

^秘ク魚上の音本はらぬのい

とよし〜とあさ〜と 右取と〜と魚の音とちて

前よりの夕顔の宛がし 地力より〜

兼口深中とさ事とけ〜と〜と〜と

〜あて〜も

い〜ある〜と

シク〜の〜あ〜

^秘湯合〜と〜と〜と〜と〜と〜と

ま〜と〜と〜と〜と〜と〜と

あ〜と〜と〜と

昔の〜と〜と〜と〜と〜と〜と

〜と〜と

ま〜と〜と〜と〜と〜と〜と
或はし 清濁

葉口〜の〜と〜と〜と〜と〜と〜と

備〜と〜と〜と〜と〜と〜と

あ〜と〜と〜と〜と〜と〜と

指〜と〜と〜と

秘
己 初々々々々々々々々々

私之鳥の羽々々々々々々々々々
よやうしんあひあひあひあひあひあひ
つそそそそそそそそそそそそ
凡何とじふうふうふうふうふう
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
しとす終つてつてつてつてつてつて
ふらふらふらふらふらふらふら
秘
山々々々々々々々々々
秘
山々々々々々々々々々

秘
山々々々々々々々々々

明玉集
わさささささささささささ

今乃脚獄つてつてつてつてつて
信乃初言松乃子云わされらるるあつた
男のささささささささささ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
つそそそそそそそそそそそそ
男れりりりりりりりりりりりり
独れらららららららららららら
行らららららららららららら

美事...
美事...
美事...

図書大和...
図書大和...
図書大和...

み...
み...
み...

何...
何...
何...

兼...
兼...
兼...

時...
時...
時...

令...
令...
令...

と...
と...
と...

尺...
尺...
尺...

却...
却...
却...

和...
和...
和...

う...
う...
う...

保...
保...
保...

あ...
あ...
あ...

わ...
わ...
わ...

感...
感...
感...

う...
う...
う...

らん...
らん...
らん...

百劫とらるる世と

みづの世と

七千万歳

從釈尊入滅至慈尊出世隔五十七俱胝

六十百千歳往生要集 弥勒下生經云將來久

遠劫於此國界成佛云々 義哉云々

いとさらさら

河秘 ありとるなる

義 ころの外 巨

同書とる事さるる 依りたる

五方の上

何れの世れらるる事さるる方の上

新まのころのころ

義方れりとのころと説く事

その何れとのころと説く事

因として未來果とるる事

私とるの世れとる前世の音因

欲知過去因見其現在果欲知未來

果見其現在因とる事りあせれ音因

つらつらして現在ある事 今生が

くわい〜みれん〜
とあめ〜
をい〜

図書前果の〜
やん中お〜

〜

新集〜

〜

中〜

〜

や〜

源の年〜

〜

〜

集同作者の批判〜

早世の〜

〜

或抄御統子〜

私云^レ此^レの院と云ふ人らも其^レ院
と云ふ人の言ふと云ふ事と云ふ
事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

兼阿曰し^レ一^レ臣下の事と云ふ事と
云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

わづらひし^レ出^レ出^レ
諸院^レ別^レ高^レ顔^レり^レわ^レり^レ何^レも^レ例^レなり^レ略^レ
平生^レ人^レと^レ事^レぬ^レ流^レり^レと^レ必^レ然^レなり^レ

わづらひし^レ門^レ乃^レ世^レの^レ事^レなり^レて

河原院の事

私云 拾遺才と秋奇^レ。 河原院^レ
てわづらひし^レや^レや^レ。 秋^レ事^レあり^レと云ふ事と云ふ事
事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

私云 拾遺才と秋奇^レ。 河原院^レ
てわづらひし^レや^レや^レ。 秋^レ事^レあり^レと云ふ事と云ふ事
事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
事のすゝ事

あつ〜

あつ〜

あつ〜

あつ〜

あつ〜

あつ〜

あつ〜

あつ〜

あつ〜

あつ〜

あつ〜

あつ〜

あつ〜

あつ〜

あつ〜

あつ〜

あつ〜

あつ〜

これと行とすゝあらはるるをいふなり
なり

築岡のこれとすゝて海路に
これ半更とて孰多きなり
なり

ありしに

秘せしはありたりしなりと
りし行

岡書の家のありしなり

居しるなりは院のありしなり
ありしなりとありしなり
ありしなりとありしなり

源の

ありしなり

榻のありしなりとありしなり
ありしなりとありしなり

ありしなり

ありしなり

こゝろの事なす

兼阿乃中^秘のあまのついで

あつらひのついで

院の禰^秘

ついで

ついでついでついでついでついでついで

あまのついでついでついでついでついでついで

ついでついでついでついでついでついで

源^秘此御書とおきついでついでついでついで

経巻のついで

兼阿乃下^秘皆経巻のついで

ついでついでついでついでついで

兼阿乃のついでついでついでついでついで

ついでついでついでついでついでついで

ついでついでついでついでついでついで

ついでついでついでついでついでついで

ついでついでついで

兼^秘事ついでついでついでついでついで

秘
顔秘りり道

ふふふふ

義神秘不夜天

ふふふふ

下秘義秘道

院秘のわらわ

殿秘ふふふふ

尾秘大秘信秘義秘ふふふふ

秘
し秘ふふふふ秘顔秘の源秘と彼秘信秘

殿秘と義秘ふふふ秘尾秘大秘信秘義秘

ふふふふ

ふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふ

源秘の成秘れ秘ふふふ

ふふふふふふふふふ

ふふふ

水戸の事

どういふ事か

陪膳役送る事ありて石部合行

うらみあり

あま中門とらさうり物事

あま中門とらさうり物事

君よあまの事と伝ふあま

或云あまの中門の事あり

水原抄云行枝門の事あり

と中門の事あり

と云ふ事あり

と云ふ事あり

兼岡あまの中門中門の事あり

と云ふ事あり

鳥井あまの事あり

庭もやういふも秋れ也〜
池もやういふも

いづ〜もあ〜とふ〜

何卒此池の神あるやう〜

〜とふ〜とふ〜

乞〜り源の約

何〜
氣疎 氣外

乞〜〜人〜

庭ら〜のあ〜

別紙しれ何〜

庭ら〜のあ〜建〜る庭〜別紙〜と大

御食とこふりれ〜事あり〜小夜あり

小夜及雜言あり〜
秘

此ら乃〜
并 和物

乞〜もあ〜け〜あ〜あ〜

筆や乞又あり〜

何書これと〜と源の〜

悟のや〜れと女のお〜

とありありの事

又今案決の詞もまじらうらなけりとの事

よはひの事とある詞とよはひの事とある詞

とある詞の事とある詞の事

とある詞の事とある詞の事

とある詞の事とある詞の事

とある詞の事とある詞の事

とある詞の事とある詞の事

とある詞の事とある詞の事

とありありの事

とありありの事

とありありの事

とありありの事

とありありの事

とありありの事

とありありの事

とありありの事

とありありの事

宛とらむしきとらむしきとらむしき
そらむしきとらむしきとらむしき
今の兼印候とらむしきとらむしき
意れ候とらむしきとらむしき
あつちかしてらむしき

兼印候の旨とらむしきとらむしき
とらむしきとらむしき

候とらむしきとらむしき

候の宛とらむしきとらむしき

何とらむしき 秘

今とらむしき

源とらむしきとらむしき

秘 候とらむしきとらむしき

とらむしきとらむしき

秘 候とらむしきとらむしき

あつちかしてらむしき

候とらむしきとらむしき

候とらむしきとらむしき

あまのふみれし海をいぢり
荒 雲のしぢりし海をいぢり
あまのふみれし海をいぢり
あまのふみれし海をいぢり

図書行とくまのつらき
あまのふみれし海をいぢり

あまのふみれし海をいぢり

あまのふみれし海をいぢり
秘箋曰
昇甲

あまのふみれし海をいぢり

海くろく海をいぢり

福とく海をいぢり

あまのふみれし海をいぢり

あまのふみれし海をいぢり

あまのふみれし海をいぢり

あまのふみれし海をいぢり

あまのふみれし海をいぢり

あまのふみれし海をいぢり

あまのふみれし海をいぢり

源のく救うしおる名はうはるゑとや
さるる業さうしあうりほ中たは
るしあはるしあうりほ中たは
しししとあはるしあうりほ中たは

惟光君

は院(集)るるとあはるしあうりほ中たは
右遊うしあうりほ中たは

^秘惟光うん(神)たはあはるしあうりほ中たは
あうりほ中たは

業曰はあはるしあうりほ中たは
惟光うん(神)たはあはるしあうりほ中たは
あうりほ中たは

惟光うん(神)たはあはるしあうりほ中たは
あうりほ中たは

あうりほ中たは
あうりほ中たは

^秘あうりほ中たは

集 だんご (dango) の 何れ (dango)

あゝいゝいゝ

図書 (sho) の 可成 (sho) の 何れ (sho)

りんごん

夕葉 (yuba) の 集 (shu) の 何れ (sho)

はる (haru) の 何れ (sho)

集 (shu) の 何れ (sho)

思 (omoi) の 何れ (sho)

夕 (yuba) の 何れ (sho)

款 (kan) を 忘 (わす) れ

集 (shu) の 何れ (sho)

夕 (yuba) の 何れ (sho)

集 (shu) の 何れ (sho)

夕 (yuba) の 何れ (sho)

集 (shu) の 何れ (sho)

夕 (yuba) の 何れ (sho)

夕 (yuba) の 何れ (sho)

夕 (yuba) の 何れ (sho)

何集 (shu) 日記 (shu)

高直と云ふ條の別とて子と云ふ條に
おまれの爲のふせの事なり

六条と云ふ事なり

條の事昇一 行多うとて書し置也

也

らと云ふ事

美日條の事なり

なる事なり

事なり

^秘六条の事なり

何れと云ふ事

夕親れと云ふ事なり

ありと云ふ事

^秘美日條の事なり

の事なり

ありと云ふ事

事なり

事なり

かきまゝに書きたるは
あつたはらへ

あつたはらへ

横刀 日記

うゑのあつたはらへ

秘 原乃右衛門

うゑのあつたはらへ

秘 右衛門

あつたはらへ 原の初

あつたはらへ 原

あつたはらへ

あつたはらへ

あつたはらへ

あつたはらへ

あつたはらへ

あつたはらへ

白女君

あつたはらへ

このひき

いふ海にゆく

おのまゝにゆくはなれはる柳

阿世もあはれ

伊路ゆゑにゆくはなれはる柳

よわきとてゆくはなれはる柳

秋草れゆくはなれはる柳

はらのよきとてゆくはなれはる柳

花集
いふ海にゆくはなれはる柳

いふ海にゆく

これのまゝ

我らゆくはなれはる柳

花集
着ゆくはなれはる柳

いふ海にゆくはなれはる柳

私に着ゆくはなれはる柳

ありはる

おあらしとらん

夕氣よおちれば事^事前^前の心^心もさ^さら^らし^しき^きな^なら^らず^ず
いとあやうくていふもえ^{もえ}と^との^のこ^こら^らつ^つこと

病者のえと^えと^とら^らる^る死^死相^相の^のい^いひ^ひ

^秘業^業云^云何^何れ^れ業^業者^者と^とし^して^てい^いふ^ふ上^上に^に病^病者^者の^のわ^わ

ら^らの^の終^終極^極の^のい^いひ^ひの^のい^いふ^ふこと^{こと}

い^いふ^ふこと^{こと} 係の^のい^いひ^ひ

い^いふ^ふこと^{こと} 係

い^いふ^ふこと^{こと} 係

係の^のい^いひ^ひの^のい^いふ^ふこと^{こと}

い^いふ^ふこと^{こと} 係

業の^のい^いひ^ひの^のい^いふ^ふこと^{こと}

私の^のい^いひ^ひの^のい^いふ^ふこと^{こと}

友の^のい^いひ^ひの^のい^いふ^ふこと^{こと}

子の^のい^いひ^ひの^のい^いふ^ふこと^{こと}

い^いふ^ふこと^{こと} 係

い^いふ^ふこと^{こと} 係

い^いふ^ふこと^{こと} 係

^秘と^とら^らる^る死^死相^相の^のい^いひ^ひの^のい^いふ^ふこと^{こと}

この世とあれとおろせよ

龍口
虎(西彼)を
虎(三)は昔者
と世(共)首
ふ(の)指(指)を
か(ん)子(子)

ありせよと作せよと
徳方よの直よ作
られぬ

人よみれよ

そのまほし

あつたつれ

あつたつれの子

かすのたさくら

図書ありとれ子刻 徳也

此(此)世(世)は(は)わ(わ)り(り) 寛(寛)平(平)子(子)衆(衆)と(と)よ(よ)る(る)

十(十)人(人)女(女)人(人)時(時)よ(よ)と(と)さ(さ)ら(ら)る(る)内(内)宿(宿)わ(わ)り(り) 熟(熟)食(食)

あり月(月)養(養)と(と)難(難)と

あつたつれ けろ登

はらせよと作せよとありあり

あつたつれ

誰(誰)何(何)火(火)行(行)

史記

本朝文粹フシ卷一云題タテ夜行舍人鳥養有
三歌ツツ源順シモタラ

夜行ヨシヨク宿ヨシ夜ヨシ驚オドロク火ヒ旧府中ヨシキリノナカ呼ヨウ曰イハレ火ヒ危ヤブシ彼カ
誰何ナニナニ

秘文選五十陸璣リクキョウ新漏刻銘シロクツク之ノ授オウ景測カゲノク辰チン
徹スグ官戒クワンケイ井守イノミ以ニ水ミヅ火ヒ分ワケ茲ココ日ヒ夜ヨ以ニ水ミヅ守ミ臺ダイ
者ノ為シ汲ヒク漏ロウ以ニ火ヒ守ミ垂ツ者ノ為シ夜ヨ視シ刻クツク數ス

私シ之ノ是レハ漏刻ロウクツクのノ儀ノ

衛宏ヱコウ載オモシ傳呼デンコ之ノ節ノ較カク而シテ未ダ詳シ注衛宏ヱコウ後

旧議曰夜漏起官中城門傳五伯官
直符衛工固戸擊木折傳呼備火
行ハ秘ヒ等ト之ノ義ノ志シ業ノヲシ執ス之ル

く他とありしやうて

は人の力とありしは新りるにありし
ととありしは又禁中とありしは
まゝの由りしはとありしはと

りつよふらね侍とありしやとあり
かたよりしるの事よふれしやとあり
はつ一孝忠とよふれしやとあり
まふいふん

^{そと}名得し 乞と右對面とあり

實一刻侍長右對面 延喜元年より 同實

一刻侍長奉之後籠口武士對面なり

實一刻の心豊時の簡と奉と其後

侍長のふらね侍ありしやとあり右獨

とりか後よふらねの井しし侍長は母

りかとりれてりねの事ししは次は殿の

そのおしわりとの井ししとあり右獨と

同ししは殿の女にありしやとあり

の列のふらねししはまねとあり

とうましり

^け延喜九年正月九日源入原揚宣旨云
候籠口守とて夜已上を致不奉早預
着到宜侍後作者

^秘延喜近衛式云 凡夜行者内裏官一人
人近衛一人起亥一刻迄子四刻但右起
廿一刻迄寅四刻

延喜元年よりこの事ありけり
延喜元年よりこの事ありけり
延喜元年よりこの事ありけり

延喜元年よりこの事ありけり
延喜元年よりこの事ありけり
延喜元年よりこの事ありけり

延喜元年よりこの事ありけり
延喜元年よりこの事ありけり
延喜元年よりこの事ありけり

延喜元年よりこの事ありけり
延喜元年よりこの事ありけり
延喜元年よりこの事ありけり

葉曰昔の曰の男子は通稱(唐)

孔子(孔子)

右(右)

お(お)

秘(秘)

お(お)

お(お)

お(お)

お(お)

お(お)

お(お)

物(物)

お(お)

秘(秘)

お(お)

お(お)

お(お)

あはれいふ御事なりと

おのれはのちかたらくいふ事なりと

あはれいふ事

長押とうきりおぼれ事

おのれいふ事

おのれいふ事

あはれいふ事

おのれいふ事

おのれいふ事

あはれいふ事

おのれいふ事

あはれいふ事

あはれいふ事

江談云 寛平法皇と京極御息所同車

渡河原院歴覧山水形執入夜月明假

取下御車置為御座と御息所令執給

之間用塗籠戸有出聲法皇令問給對

云融候欲給御息所法皇作云汝存生

為臣我為君何出此語乎靈物抱御息
所御腰半死牛童獨近侍仍以後童人
之召人々老寄御車令乘御息所顏色
無之杖抱還御之後召淨藏大法師令
加持諫蘓生々
藥よのすゝるをこれと
け事しうゝあひいしり

力のうへも

保の力とて

^秘我力も恐怖わきまもそれとも忘るそ

おしてくさの事よきしむあつた

らひしあつた

何しとらひ合せよとてあつた

おししあつた

^秘さうあつたしとてあつた

はよしあつた

前よあつたしとてあつた

あつた

あつた

あつた

秘 ころろ表ししつて相

をくひおろく

可
くろの海にわの魂魂れ二種有り之魂を
心と名付魂(天人此處)に陰部散れ
まの則をくろあれ行(蘭生)の魂(七魄)
屍と名付其形鬼神のつく(五云)り
ころれおろく小舟通行り是とを此れ身
と習(十三年)母中ら母海(十三年)
年中くろの屍(ま)りて長(くろ)く(ま)れ魂

し魄とくまら行(くろ)く(ま)れ魂を

く(ま)ら(くろ)く(ま)れ魂 兼曰

おろく(ま)ら(くろ)く(ま)れ魂

秘 名進(くろ)く(ま)ら(くろ)く(ま)れ魂

く(ま)ら(くろ)く(ま)れ魂

南殿乃鬼なる(くろ)く(ま)れ魂

秘 大徳
何(くろ)く(ま)れ魂の自信(くろ)く(ま)れ魂
陣せんとする時南殿(くろ)く(ま)れ魂
了(くろ)く(ま)れ魂の帯(くろ)く(ま)れ魂

おのわさる

おのわさる

おのわさる

おのわさる

おのわさる

おのわさる

おのわさる

おのわさる

おのわさる

おのわさる

おのわさる

おのわさる

おのわさる

おのわさる

おのわさる

おのわさる

おのわさる

おのわさる

秘 女院の御書

君の御書

右の御書

の御書

圖書の御書

の御書

秘 右の御書

の御書

録の御書

の御書

右の御書

の御書

用の御書

灯の御書

屏風の御書

屏風の御書

の御書

の御書

何れもさうなる

箋曰くこれ

^秘花の養と月よわあそり〜とさなる

〜あつらひのさあ

物乃何〜と

^美関古付養とのと

^何延長八年信源殿霹靂之後貞宗法

師惟信源殿之時関大人之音是邪

神不可為（ま） 書王記

〜中ら〜とあつら

^秘惟光と尋〜と

〜集れ〜と

何れ〜とあ

^秘惟光

同寺惟光も好色の故

^何月の〜とあ

〜と〜とあ

但し初〜と

とらふもて源公才

築岡前のみさし
とらふもて源公才

貴才のうらみ

とらふもて源公才

か

書にたわし

とらふもて源公才

右近たらの

とらふもて源公才

あし

最もえ

右まよ

これひと

保ひと

あも権されぬ

とらふもて源公才

秘

暇日山に上りてなり非光り何ぞれと云
丁々てけくおの神と不思議なる事

秘
石例や

秘
石例や

秘
夕亂上り自然なるて遠例みま一終
事いさうりつたれと

秘
石例や

秘
石例や

秘
石例や

秘
石例や

圖書非光り深の味は海にのぞみ
秘
石例や

秘
石例や

秘
石例や

秘
石例や

秘
石例や

秘
石例や

秘
石例や

昔尼のくく女房

^秘惟光の父のりれと

とつてくもて

同書之青衣紙よけ何のくもて

^付文籙とくもて日本紀云 水神同象

女同象此云美都波伊姪母言一むす神

髪白くもて老嫗稱くもて

^{後撰}とくもてわくくもて髪もたつ川乃

とつてくもてきよけの珠

一統年よりぬれい獨うきりせし

こと二膝より出る中よあひさ

しつりてこの端とくもて入るる

^秘とつてのきよ

かこふ

^付信よとくもてくもてくもてんれ ^秘曰

ゆくもて経れよとくもて

ゆぐれのりれ

るのりれ

夕氣し海にえりてはつら
うとひしるよなきしつら

惟光れ車よのせんあまうらむる
つら

^{兼行}類聚国史云 弘仁八年八月従三位橘常

子兼一以席累葬 兼分と源河妻

問云いやはるは庭よ一答ふはいし

るそつとそ外つらぬもい

けやう

あうあうい

造りていしとえしつら

めくれまゝい

源のさゆ

まや馬よそ

車よのう白よと衣よとわりのせとん

しつら惟光う送はつらつら

兼光つらつらつらと惟光うし車よ

つらつらつらつらつらつらつら

まはし 別して海中にくだりぬ

義岡は時よえのまじりていづ

いづの巻中一りの紙

此のころと物の

^秘 録の宛

大抵れがのころとす

とて取中ぬる候のれも

その家よりいふとよみ

^秘 録の上れ録氣と為るころとあ

のゝり

あらうころと

け痛くよらうとらして

はよるころとす

とこの穢まうたころと

非のころと

非のころとあつたころ

ありふたころと

と道よりせたるころと

九月の斎月とて百より出陣事し申す
此様よりおれおにうと幸也うら
るやうし 秘箋日

あつたやうと

咳嘔病

むつと

何ぞ

秘箋とるうとくしんをれし以中なる

附しこのおや

花田

はつとさうと

秘 願中將の御

わつと

筆やみしんくわうくわつと

まわつり

以中將執使と

いふおんをれ

以中將の御

觸様

乃(おん)せのし

原の御存よのいふおんをれ

あしよまゝに定むるに
らんと推考して中持のま
じおつておまゝ

及中持のまゝに
あしよまゝに定むるに
らんと推考して中持のま

あしよまゝに定むるに
らんと推考して中持のま
じおつておまゝ

あしよまゝに定むるに
らんと推考して中持のま

あしよまゝに定むるに
らんと推考して中持のま

あしよまゝに定むるに
らんと推考して中持のま

あしよまゝに定むるに
らんと推考して中持のま

あしよまゝに定むるに
らんと推考して中持のま

あしよまゝに定むるに
らんと推考して中持のま

あしよまゝに定むるに
らんと推考して中持のま

ふらふら言ふそ何さくふりうあ

案くそりり山の前拾遺集乃歌よめ

ねむ

私書
拾字

そりり色山言ふそ何さくふりうあ
そりり色山言ふそ何さくふりうあ
そりり色山言ふそ何さくふりうあ

元禄志

私書行ノ筆ありこい久山鳥の前

そりり色山言ふそ何さくふりうあ

そりり色山言ふそ何さくふりうあ

そりり色山言ふそ何さくふりうあ

かのうあま

右の書
左の書
右の書
左の書

右のうううあま言(若ううううあま)

ねえうううあま言(若ううううあま)

そりり色山言ふそ何さくふりうあ

そりり色山言ふそ何さくふりうあ

源のうううあま言(若ううううあま)

そりり色山言ふそ何さくふりうあ

そりり色山言ふそ何さくふりうあ

そりり色山言ふそ何さくふりうあ

何うか〜+

あ〜原のれねと指えう海名し〜

鉤

石^秘のれねと指えう海名し〜

〜

〜

図書し〜

〜

〜

〜

〜

原のれねと指えう海名し〜

石^秘のれねと指えう海名し〜

〜

荒毛^秘狩少荒海名し〜

〜

〜

〜


~~~~~

<sup>秘</sup>しつゝいしき事し難し〜

あつ〜うのて終く〜

光よの終し 集日

関書後成つう各の判し終し〜

しつゝいしき事し難し〜

~~~~~

^秘惟光う出書し〜

法梅よす〜

~~~~~

~~~~~

よ〜

のあ〜

~~~~~

<sup>秘</sup>源の初惟光う〜

~~~~~

石書〜

~~~~~



惟えり心秘

圖書わらうしし事と思ふ

ころ比の山屋つれ

秘夕氣れ言ふらふ新料れうりのまきひ

わらうらうしし地なり

義岡河原院とこのよこし深の山んま

御余のさうのさう新し

多し海のうらうら

秘妙強し わられさうお

義岡院いふせれらうらうら 魁いろうね

おや

たりおまのうら

惟えりと夕氣れうら

及とさうおら

海とさうら

十月乃月

八月を費し

かうれり



鴨川系 ( 東の河原の皆鴨川 )

鳥部也れうこ

<sup>秘</sup>

鳥部也れあさうりきやうくは神なり  
平七のんうういあじううあうん  
只今れんうふ何うおわされぬ

圖書但鳥部也れ初入るは吳也  
鳥部也事何のう

あうつさぬ

鳥部 ( 靈鳥 )

あうりこ

只それ何いりいぬ

みりしうけ

燈明のうき

その屋は

板屋ううく 女の道れういぬ

張るその念佛

葉の葬送の前の七言念佛し  
身後抄よん名うり何う  
身後抄よん名うり何う







人僧之官せしむ

兼同行切乃つらつらと

ほれらりや

ほのなかりのむす

入りまはる

ほのむねおのきく

右廻の屏風つら

ほの氣とよきまの屏風のあり右廻

つら

おろしむす

ほれらりおのむす

つら

ほれらりおのむす

つら

おろしむす

ほの氣とよきまの屏風のあり右廻

つら

私云ひ兼おのむす







いづれもあはれ

源の巻

いづれもあはれ

<sup>秘</sup>源の巻 といふことし 右別 源の巻

いづれもあはれ

源の巻

いづれもあはれ

<sup>も</sup>杜子春も 死別 各 殺 再生 別 考 測 こと

いづれもあはれ

秘 巻 目

いづれもあはれ

源の巻 といふことし 右別 源の巻

いづれもあはれ

いづれもあはれ

いづれもあはれ

源の巻 といふことし 右別 源の巻

いづれもあはれ

<sup>秘</sup>源の巻 といふことし 右別 源の巻

いづれもあはれ



多のこたへ

たのしみよきこと

のこたへよきこと

筆蹟をさうな

作えおかけ

源の由海と作え

あつらひ

源の心の中

あつらひ

源の心の中

あつらひ

あつらひ

あつらひ

筆蹟の心

筆蹟と云ふ

あつらひ

あつらひ

あつらひ



紅のまはら〜  
深れ〜  
築坂回〜

又非光うき〜  
深の海とあら〜  
さ海也

長〜のり〜

波堤音碑 蓋水日波礼記注

白川の段 ねり〜

関去  
賀茂川の段  
高〜つれ  
とに海白と  
兼せ〜  
〜

賀茂川花の段 宿鴨河使ら〜  
〜  
賀茂川秘の段 移白川日  
移元

水くら〜

関書 絶入〜の神

みら乃元〜

川身河のせ  
〜  
みらの〜







君も去るなり

<sup>秘</sup> 源も伝と移るなり

我も心と移るなり

わが心と移るなり

<sup>秘</sup> 衆所の中を流るる心とわが心との心

わが心と事との心とわが心との心

多きなりわが心との心との心

二条流るる心と移るなり

わが心と移るなり

衆所の中を流るる心とわが心との心

わが心との心との心との心

わが心との心との心との心

わが心との心との心との心

わが心との心

わが心との心との心との心

わが心との心との心との心

わが心との心

衆所の中を流るる心とわが心との心



















世々つゞく  
業す我々と  
責て

秘

業曰海のうつくしき世のよらふにれ海を  
つとせねとる若く業乃天帝下世れ  
あそれあつたふ海の名どつとつて  
何らうと書きし

大敵のうつくしき世

この世のうつくしき世のうつくしき世

この世のうつくしき世のうつくしき世

とんつとつとつ 秘業曰

あつとつとつ

大敵のうつくしき世

女よ

うつくしき世のうつくしき世

うつくしき世のうつくしき世

病れ餘氣と

うつくしき世

うつくしき世のうつくしき世

秘 業天下船操

うつくしき世



相みまの係とくく御流せぬ

也の流との井可

<sup>半</sup>相つかし

<sup>秘</sup>相重申て係の事し船機うれん

~~~~~

大敵うら水車しと

私養尼大匠の車しと直よ養よれ

方し修りしとささし目し養しと相と

思ひ新ぬる人

我より何しとわぬ世に

係の流し内申し甲しとわらうと月

まう厚まうのりともそ

^秘二十日わ申しと平庵

前よふとふとふとふと行りしと及中相也

まうあつらひの係とくく御流せぬ

係の流し

んんそまうしとらふとわらうて御流のき
まうあつらひ

関書若葉草のこころにふくまはるる
出づる序のこころ

右遊とてしる

^秘こころの二葉草のこころ

花のこころわが

^秘花の約

海とわがこころのこころ

^秘夕負とわがこころのこころ

^井夜院とてしる

こころのこころのこころ
海乃約

葉草のこころのこころ

こころのこころのこころ

こころのこころのこころ

こころのこころのこころ

こころのこころのこころ

こころ

みまわり

^秘葉 右遊の約


~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~


とのまゝのしるしをよむに
らりし名とりし程も
しあつらん事の程も
しる程もしる程も
と右邊うしろお飾り

あつらん

^母業右衛門あつらん

岡去又母

之位中将とらん

夕負よれ又の官

らりし名とりし程も

^母之位中おのりし程も

我が方のりし程も

^業之位中お友位昇進し時せよあつらん

くわんじらぬ

願中おまゝに女将

業よれ又の官

十年十月廿日官符在右京職各署
職二箇

トシヨシヨシヨシヨシヨシヨシ

子一の京丹後守

何伴始 任ハシメテ今ハハシメテ

ヨシヨシヨシヨシヨシヨシ

ヨシヨシヨシヨシヨシヨシ

兼白河守ヨシヨシヨシヨシヨシ

兼丹波守ヨシヨシヨシヨシヨシ

ヨシヨシヨシヨシヨシヨシ

和方邊ヨシヨシヨシヨシヨシ

兼因大守軍一ヨシヨシヨシヨシ

ヨシヨシヨシヨシヨシヨシ

ヨシヨシヨシ

ヨシヨシヨシヨシヨシヨシ

ヨシヨシヨシヨシヨシヨシ

ヨシヨシヨシヨシヨシヨシ

ヨシヨシヨシヨシヨシヨシ

これいよ

秘葉前日係れ乃中ぬのさり
友ありしりこあり其時の非きうわ
ふ

りつれもあつね 係の心

あふれさい

^秘おののさりのあつね

^秘乃中ぬりあつね

中將の

あふれお後のみ

あつね

友通うつら

女

あつね

あつね

あつね

あつね

あつね

Handwritten cursive script on the top left of the left page.

Handwritten cursive script on the top right of the left page.

Handwritten cursive script on the top left of the right page.

Handwritten cursive script on the top right of the right page.

あはれなる心にて
うき世の事など
しるすに
あはれなる心にて

あはれなる心にて
うき世の事など
しるすに
あはれなる心にて
うき世の事など
しるすに
あはれなる心にて
うき世の事など
しるすに
あはれなる心にて
うき世の事など
しるすに

あはれなる心にて

あはれなる心にて
うき世の事など
しるすに

十九日

あはれなる心にて
うき世の事など
しるすに

あはれなる心にて

あはれなる心にて
うき世の事など
しるすに

右遊并の母もウツルよれりのみ

私に揚りたる今の書は右遊の母死す

て後のウツルよれ乳母れ

と位り書れ

ウツルよれ又と位中持

のぬわたり

ウツルよれウツルよれ

あり

あり

ウツルよれウツルよれ

あり

あり

あり

あり

あり

あり

あり

あり

かゝるし事とあるは

うらやまのこころ

^女業の約ありて

かゝるし事あり

うらやまのこころあり

うらやま

うらやまのこころ

^女業の約あり

うらやまのこころあり

うらやまのこころ

うらやまのこころ

^何五行大義 ^{中二}陽體剛強自在陰柔

順經湯婦人有三從之礼毎自尊義

義曰

うらやまのこころ

圖書要せしむ極まるる如行

新編のまゝにこれよりし事あり

うらやまのこころ

らんらんらん

秘 録 文 字

あつらひ

秘 録 文 字

いんげん

秘 録 文 字

いんげん

えのころ

秘 録 文 字

いんげん

秘 録 文 字

いんげん

秘 録 文 字

いんげん

秘 録 文 字

いんげん

秘 録 文 字

いんげん

因書にふりていふにわらう道徳を
しめしむるにこれぞ也にや
ふよあつたかきふらうにさう
ふれしむるにこれぞ也にや
ふらうにさうにこれぞ也にや
後よにこれぞ也にや

和云

君の心をわらうにさう
ふらうにさうにこれぞ也にや

此并業或の海にたのえれさうに

しめしむるにこれぞ也にや
ふらうにさうにこれぞ也にや

えらうにさうにこれぞ也にや 右並

右並にこれぞ也にや

。感わらうにこれぞ也にや

新業を道とてえらうにこれぞ也にや
新業を道とてえらうにこれぞ也にや

私にこの書を書きしことなる事

一

か

秘 兼て三書院

一

再

一

留

八月九日正長夜千聲万声之止時

白氏文集

一

千声万祥

兼同原の

止時

か

秘 兼て

一

か

秘 今


~~~~~

蝉~~~~~

~~~~~

~~~~~

作豫昇

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~  
秘

~~~~~

~~~~~

~~~~~  
元野

~~~~~

~~~~~  
秘

~~~~~

~~~~~

~~~~~


しんがとかりし海軍は存続しし由にせむ
しんがとかりし海軍は存続しし由にせむ
しんがとかりし海軍は存続しし由にせむ
しんがとかりし海軍は存続しし由にせむ

しんがとかりし海軍は存続しし由にせむ

しんがとかりし海軍は存続しし由にせむ

しんがとかりし海軍は存続しし由にせむ

しんがとかりし海軍は存続しし由にせむ

しんがとかりし海軍は存続しし由にせむ

しんがとかりし海軍は存続しし由にせむ

しんがとかりし海軍は存続しし由にせむ

しんがとかりし海軍は存続しし由にせむ

しんがとかりし海軍は存続しし由にせむ

しんがとかりし海軍は存続しし由にせむ

しんがとかりし海軍は存続しし由にせむ

しんがとかりし海軍は存続しし由にせむ

しんがとかりし海軍は存続しし由にせむ

しんがとかりし海軍は存続しし由にせむ

おのれをいふこと

^秘 存後のこと

のむけとされぬこと

^秘 宣明の心(おのれをいふこと)の事

いたるのむけの事(おのれをいふこと)

よとあはれ(兼白)

衆生の善因(兼白)

をうし(おのれをいふこと)

元輝うら

おのれをいふこと

^秘 元輝の心(おのれをいふこと)

おのれをいふこと

^秘 元輝の心(おのれをいふこと)

おのれをいふこと

おのれをいふこと

おのれをいふこと

元輝の心(おのれをいふこと)

おのれをいふこと

ふいふいふいふいふいふいふい

同去そまのあふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふ

たふふふふふふ

水色おろりそ

^秘 深の好色よあらしらるる

^多 多のりて

そののののの

そののののの

^秘 女将ののののの

ののののののののの

ののののの

紫の紫の紫の紫の

の二葉あり源れ其後うさたし善信

のりねとりのののののの

ののののののののの

とるののののの

おろり

^秘 深の好色よあらしらるる

ののののののののの

紫の紫の紫の紫の

ののののののののの

あゝ

是中へ萩のふれ事

わづらひまらん

暮ららし時め事

うらむおしひききよなるこころなる

まゝなる海なる

兼日付殿に送る女将のな中と係り

あゝははは新瑞の萩のこころなる

とらみれたかたなるのこころなる

あゝ

なごりなりし

萩乃さゆ也

竹のなごりなりし

かゝる海なる

れらりし海なる

なごりなりし海なる

なごりなりし海なる

なごりなりし海なる

ては川より舟持

舟の負上にあたりしは人といふも世

みれいといふりしは此名ありし

ふし道にた名ありしといふも

と名とありしといふも

あふ乃早九日

^秘 集りしつゝとて訓よし

^花 十月四日此間四十九日よあ

集り又中へ立ち入りて夕親上事と

夕息上の列傳され別人の事相交り

事ありしは先それい文章此文に史漢

よも付録あり

のえ乃法苑堂とて

^集 李部王記曰天慶八年正月十八日室正

五位下藤寛子卒二月八日當三七日於

叡山東法華堂修説誦布施名香一晝

僧施錢万百文 篁、日記云付男の

候つて廿八日其の事と硯乃水に

て法苑珠林とていふえの三昧とて
日乃とていふなり

法華三昧堂在止觀西院弘仁三辰四
月五日結攝秋七月上旬出来之功甫就
移行法華長講延曆寺縁起略之

さしとていふなりとていふなり

同半乃とていふ布施の料

此ののしとて

箋源の約談とて儒者

らん乃とていふなり

文章博士也

箋曰文章生れ孝子業とていふなり

後博士とていふなり

らん乃とていふなり

箋曰源氏の自作の預文と文章博士と

んせとていふなりとていふなり文章博士と

してとていふなりとていふなりとていふなり

箋曰乳文自作之例 行信和天皇貞

觀九年勅學院南邊更建一院号延命
院自制願文云々

^多家室之四十九日祝文之例

^苑皇明親王家室藤原氏四十九日願文後

江相公朝綏書之見文粹詞之生者思滅

祝尊未免梅檀之烟樂盡悲來天人

猶逢五衰之日云々

関之梅相五衰と對シタル梅字十字

ノ音シカレト云々

其のくとうして

夕氣よとけりつゝ

わかれと思ひ

^秘ぬるる後

阿弥陀佛よ

曼曰徳字れ成以の自心開發の義(浄施
一佛起世く悲乳の他力中願之れに及攝
取不捨よ)とて讓とらるる義甚深也
曼曰四十九日の忌日仏の東方業抄に故よ

西方より海施と對する（法華普門におよ
觀音の事）と説く。しるしは法華意
菩薩と對向のちと歎く
多めらうらうらうらうら

兼口原自作の乳文此章と儒者此一説
して係劑といふ義ありのうらうら
竹人うらうら

兼文章平持されぬよらやうらうら
うらうらうらうら

兼因り亂され事うらうらうら
うらうらうらうら
うらうらうらうら

兼うらうらうらうら
うらうらうらうら
うらうらうらうら

兼今日結縁の切法とらうらうら
の時う若く解脱の門よらうら
うらうら解脱し師統しられうら

とらり世の世とくしんといふ

箋このに解脫門よの何時入ることも

よてはるの自修よこのまら又一巻の来

生れ再書と致しかたさるこを流わり

物くしん

花之身生れ再書とくしんといふ

^秘施しに袴よまられ給ふ海しん物

私之付箋并日箋中白

私之箋よ分給く他ノ説は是とのせ

朱雲岳箋しん

ふりこせといふくしん

^秘四十九日中の中有るしん

箋曰四十九日此間の中らるしん

ふれんそ痛の生起六道福廻り

しんしんしん何遠佛遠行よの若根と

候しん若果とさうしんしん中法経

の説

^箋天台よのふ極悪極善の成生の中らる

治よりして直斗生をたかむるの事
存する（法相一家の善善の御心は
善別是の事）信よりして中らの信を
牛と結ぶる事

秘人ともなるわが事

保の事

頼中持也

保の事

あつて

秘^秘玉

かたもあつて

秘^秘玉

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

秘^秘石室

毎一のりつる

美因係之事と方々の知の

惟光とらるる

^秘自給惟光とらるる

とらるる

美因上れ美因とらるる是の惟光とらるる

とらるる

西十條寺とらるる

とらるる

美因とらるる

とらるる

惟光とらるる

とらるる

とらるる

とらるる

とらるる

^秘美因受取の事とらるる
中におもはらしてはるる任むる事

くさくさんとせめては北条

は家わさし

揚子分書い嫡女れ又一人の執業は

つて一人のありさ 秘業日

秘あつたの巻よ

右遊いもく

秘あつたよらんあつたよらん 秘あつたよらん

あつたよらんあつたよらん

右遊いもく

右遊いもく

長い今

あつたよらんあつたよらん

あつたよらんあつたよらん

あつたよらん

あつたよらんあつたよらん

あつたよらん

あつたよらんあつたよらん

あつたよらんあつたよらん

事とえんてん

あつ海〜〜

業口は〜〜

わ〜〜

君の夢あ〜

海〜〜

海法事〜

業口法事〜

わ〜〜

河原院〜

う〜〜

業口〜〜

河原院〜〜

あ〜〜

岡古われ〜〜

乃て此の如くして祭に参るに
此の如くして祭に参るに
此の如くして祭に参るに

仲夏月ついでに此

祭中ノ返拜自^秘らりて
祭伴ら分位お下向の儀別とありて
しきりて別して分位わることなるが
あり

たしけ

御向礼又懸 襦袢 袷 別れの送おへて又南向
或 酌 祭礼具

みづらき

受^秘えお祭の

く

因事云く一掃くおのさところありと
すらりと危るおし 肩のさきとさきしり
きり

祭日師は此の時中より

よ扇とつら〜
涼新古〜ま〜
う〜扇乃用ふ〜

ゆさみや

稜何麻鞞中〜道祖神〜
よ旅りの〜と送る事古来
黄帝四十餘子〜
不留官中遂於旅余死其時誓曰吾
為神可守旅客其號遊子今道祖

神是也仍羈旅人〜饑送〜
饑送ノ処ヲ祖席ト云又此神ヲ〜
神ト云ハルノ神ト云ハル

かのふらら

篋秘室野のゆさ〜
てゆりし今〜

河源〜乃ゆ〜
ら〜神れ〜
わ何〜ゆ〜

葉目付葉のしほ今ぢりしるは
くしよの夜に暮夜しとあぢりしるは
かのらふの海にゆきしるは
しよのまゆの葉に夜しりしるは
のあしひのゆきしりしるは
あしひのゆきしるは

花
あぢりしるの夜に夜に
しよの夜に夜に
しよの夜に夜に
しよの夜に夜に

あぢりしる

葉あぢりしるしるは
名よの夜に夜に
宮蟬しるは

くしよの夜に夜に

九月の末の夜に

秘葉 立を

河海よの夜に夜に
しよの夜に夜に
しよの夜に夜に

源
心原のしるしをきくはるる海にのちしるす
秋のあはれをいふ秋のあはれをいふ

葉の白く花の赤くはるる秋のあはれをいふ
元野の（是の十月のあはれをいふ）と秋の言
中と秋の餘情は秋のあはれをいふ
好士下思ひをいふ秋のあはれをいふ
友をいふ（仍捨てし）の秋のあはれをいふ
と秋の報秋のあはれをいふ

葉の白く花の赤くはるる秋のあはれをいふ
元野の（是の十月のあはれをいふ）と秋の言
中と秋の餘情は秋のあはれをいふ
好士下思ひをいふ秋のあはれをいふ
友をいふ（仍捨てし）の秋のあはれをいふ
と秋の報秋のあはれをいふ

よるに巻のついでにして後編の巻とわかれ
まうよ事わつうしけある事一巻の
に一段幕すその教信と結する後編を
まひり

第一の巻は終の一段に後編の二部は
しる幕すその事とつうし事
に巻の次は一部五十四帖を撰とつう
とつうとつうとつうとつうとつう
ぬゆとつうとつうとつう

おれらつうとつうとつう

つうとつうとつうとつうとつうとつう
とつうとつうとつうとつうとつうとつう
実録のつうとつうとつうとつうとつうとつう
つうとつうとつうとつうとつうとつう
私に花のつうとつうとつうとつうとつうとつう
つうとつうとつうとつうとつうとつう
それらつうとつうとつうとつうとつうとつう
つうとつうとつうとつうとつうとつう

やまのふゆのまじりておのれをいふに
おれはあゝわろれ者衣紙のふゆよ
わろろの世の終し

夕氣と空蟬の事よまの皆ふまゝと
まのふゆのまじりておのれをいふに
の帝は御子のまじりておのれをいふに
まじりておのれをいふに
又黄録のふゆのまじりておのれをいふに
まじりておのれをいふに

何事りておのれをいふに
^秘あまのふゆのまじりておのれをいふに
まじりておのれをいふに

関書云筆者乃用捨
^筆りふ者の外をいふに
再よまのふゆのまじりておのれをいふに
まじりておのれをいふに

